

インターンシップを通して感じた畜産の魅力

大学・農食環境学群・3年

期間：令和7年8月18日～22日（5日間）

今回のインターンシップでは、山口県庁の畜産振興課で5日間の研修をさせていただきました。私は山口県の農業高校を卒業後、現在は北海道の大学で日々畜産について学んでいます。将来は、生まれ育った山口県に戻り、畜産を盛り上げていきたいという強い思いがあります。その夢の実現に向けて、県庁が畜産をどのように支え、地域に貢献しているのかを学びたいと考え、このインターンシップに参加しました。

1日目には、畜産振興課の業務内容について説明を受けました。畜産経営班、衛生・飼料班、生産班という3つの班に分かれ、それぞれが専門的な役割を担っていることを知り、県庁の業務の幅広さと奥深さを実感しました。普段大学で学んでいる畜産現場の知識とは異なる視点で「行政として畜産を支える仕組み」を学べたことは、非常に新鮮で印象に残りました。

2日目から4日目は、実際に現場を訪問し、多くの学びを得ることができました。農林総合技術センター、畜産試験場、中部家畜衛生保健所での研修では、ホルスタインへのお灸、直腸検査での頸管探索、牛の共進会の見学と指導など、実践的な体験を数多くさせていただきました。共進会では牛の体型や姿勢をどのように評価するのかを細かく教えていただき、日常の飼養管理が牛の姿に表れることを改めて理解しました。これまでの経験がある内容についても、一つひとつ丁寧に説明していただいたことで、新たな気づきがあり、知識をより深めることができました。

その中でも最も印象に残ったのは、農林総合技術センター（農業大学校）でのホルスタインとのふれあいです。大学では肉牛を中心に学んでいるため、乳牛に触れる機会はほとんどありません。実際にホルスタインの大きさや肉牛との体格の違いを体感し、その迫力に圧倒されました。同じ牛でも、品種によって管理の仕方や体の特徴が異なることを学び、畜産の奥深さを感じました。今後は乳牛についても知識を広げ、将来どの現場でも対応できる力を身につけたいと強く思いました。

最終日の5日目には、インターンシップ生全員で4日間の振り返りを行った後、「新規就農者を増やすためにはどうしたら良いか」というテーマでディスカッションを行いました。私は事前にSNS等でアンケート調査を行っており、その結果をもとに多様な意見を出し合うことができました。農業に携わっている方だけでなく、一般の方や学生など幅広い立場からの意見を聞くことができ、「農業は厳しいけれど、人々の食を支える大切な仕事であり、社会に必要不可欠な職業だ」という前向きな声に励まされました。一方で、労働環境や担い手不足など課題も多く存在することを改めて実感し、その解決に向けて自分がどのように貢献できるかを真剣に考える機会となりました。

この5日間を通じて、畜産は大変な面も多いけれど、それ以上にやりがいと責任のある仕事だと強く感じました。時には挫けそうになることもあります。命をつなぎ、人々の暮らしを支える畜産だからこそ続けたい、挑戦し続けたいという思いが一層強くなりました。私はこれからの大学生活でさらに牛の知識と技術を深め、農業のスペシャリストとして成長したいと考えています。そして将来は必ず山口県に戻り、地元の畜産を支え、地域の発展に貢献できる人材になりたいと強く決意しました。

警察業務

大学・法学部・3年

期間：令和7年8月19日～21日（3日間）

今回、山口県警察本部で実施されたインターンシップに参加し、警察の業務についての説明及び直接体験をする機会を得ました。プログラムでは、警察組織の概要に関する説明や施設見学に加え、警察学校紹介、サイバー犯罪対策課による実習、110番実習、鑑識や職務質問の模擬体験など、多岐にわたる内容に触れることができました。実際に現場で働く警察官の方々から業務の実情や経験談を伺い、警察の役割が市民生活にどれほど大切か実感することができました。

職業体験を通じて特に印象に残っていることは、機動隊の訓練見学です。機動隊は柔道や剣道の他に防護盾を使った制圧訓練、救出訓練などに取り組んでいます。訓練の様子は警察学校内の体育館で行われ、高さがある中でロープを渡る救出訓練の実習でした。訓練では、ロープに対して体が上にくるセーラー渡過、猿が木にぶら下がるように渡るモンキー渡過、腕だけの力で渡るチロリアン渡過などがあり、どれも迫力があり、細いロープの上でバランスを取りながらかつ迅速な救助が求められるため一人一人の力がかなり重要だと感じました。また、救出訓練では一人一人の力だけでなく、それ以上にチームとしての連携や協調性も求められていることを強く感じました。警察学校の見学では、警察官になる上で必要とされる基礎的な知識や体力、チームとして動く協調性を徹底的に鍛えていることを知り、警察官という職務の重さを改めて実感しました。

警察学校を卒業した後はすべての警察官が警察署の交番で勤務することになり、交番勤務では昼夜問わず行うパトロールの他、巡回連絡、110番通報の初動措置など多岐にわたる業務を取り扱い、原則3交替制勤務で24時間地域の安全と安心を守っており、全ての警察官にとって基本であり、原点となる仕事です。自身は交番勤務の業務として行われる職務質問の模擬体験を行い、警察官の対話力と観察力に圧倒されました。警察官が行う職務質問はあくまで任意であり、相手には自分の意志で応じてもらう必要があります。そのために協力を求める言葉選びがカギとなります。犯罪とは無関係な雑談から会話を続け、相手の懐に入って必要な情報を聞き出すその難しさを実感しました。

体験前は、警察官は主に事件や事故発生に対応する存在という印象が強かったのですが、インターンシップを通してそのイメージは大きく変わりました。警察官は日常的な訓練を重ね、市民の安全を守るため常に備えている存在であると理解しました。また、現場では、冷静な判断力や対応力の重要性を改めて実感し、自身に足りない力を自覚することができました。

今回のインターンシップを通じて、警察の業務とその責任の重さを学ぶと同時に、自らの課題を明確にすることができたと思います。今度は、大学での学びを深めながら体力面や精神面を鍛え、協調性や責任感を磨く努力を続けていきたいと考えています。今回の経験を活かし、公共の安全に寄与できる人材を目指して成長できるよう努めていきたいです。

現場に触れて変化した仕事への考え

大学・工学部・3年

期間：令和7年8月18日～22日（5日間）

この度は山口県庁の環境生活部の5日間のインターンシップに参加させて頂きました。実際の現場に行って話を聞くことや実際の課題解決に携ったことがなかった私にとって、すべてが新しい経験の連続でとても充実した5日間でした。

5日間を通して、県庁の業務に対する理解が深まっただけでなく、課題解決に向けたグループワークを通じて、具体的な手法や着眼点、そしてチームで協働することの大切さを学ぶことができました。特に印象に残っているのは、初日から取り組んだ施策提案です。一人ではできないことも、意見を出し合いながら形にしていくプロセスを経験し、チームで成果を出す意義を実感しました。最終日には、担当課の職員の方から講評をいただき、私たちが見落としていた実現可能性やコスト、普及の難しさといった現実的な視点を学ぶことができました。提案を形にする難しさを痛感する一方で、それ以上にやりがいと達成感を感じ、「仕事の楽しさ」にも触れることができました。

生活環境部の各課は、扱う分野こそ異なりますが、共通して「県民が安心・安全に暮らせる社会の実現」という目標に向かって取り組んで活動を行われていました。どの課の仕事も目の前の業務を淡々とこなすのではなく、常にその先にいる“県民”の存在を意識していることが強く伝わってきました。現場を直接見ることによりその姿勢に触れ、どの業務も県民の生活を支える大切な仕事であり、大きな意義と責任があることを実感しました。

また、若手職員の方々とお話する機会も設けていただき、働き始めたきっかけや仕事のやりがい、大変だったことなど、リアルな声を聞くことができました。就職活動を控える私にとって、自分の将来像を描く上で大変参考になり、不安が軽減されました。将来に対して漠然と不安を抱いていた私にとって、不安や疑問を直接伺うことができたのは非常に貴重な体験でした。

インターンシップ参加前は、「働くこと」に対して責任や忙しさへの不安を感じていました。しかし、実際に職場の様子を見学し、職員の方々の話を聞く中でその印象は大きく変わりました。確かに責任は重いものの、それ以上に「県民の暮らしを守る」という明確な使命があり、その結果として得られる達成感や誇りがあることを学びました。「働くこと」とは単なる義務ではなく、誰かの為になる責任ある行動であると気付きました。今では、働くことに対して前向きな気持ちを持てるようになっていきます。

同時に、自分自身がまだ将来の職業について十分に研究できていないことも痛感しました。今後は幅広く情報を集め、自分に合った職業や進路について理解を深めていきたいと考えています。そして、今回のインターンシップで得た現場の学びや感覚を大切に、自分の将来像をより具体的に描いていきたいと思います。

この5日間のインターンシップは、私の進路を考える上で非常に有意義な経験となりました。ここで得た学びを出発点に、今後も将来に向けて努力を重ねながら、自分自身を成長させ、将来は社会に貢献できる人材として活躍できるよう精進していきたいと思います。

市役所で学んだ建築の役割と自分の課題

大学・工学部・3年

期間：令和7年8月18日～22日（5日間）

私は今回、市役所の3つの課を回らせていただき、普段の大学生活では触れることのできない行政の現場について知ることができました。最初はとても緊張しましたが、市役所の方々は温かい方ばかりで優しく様々なことを教えていただき、多くの発見や学びと同時に自分自身の課題にも気づくことができ、とても充実した時間になりました。

まず建築指導課では、建築基準法などの法律に基づいて業務が行われていることを知りました。基準法などの法律の内容はどれも条文の数が多くとても複雑で、理解するまでに時間がかかり、自分の知識や理解がまだまだ足りないことを痛感しました。そして、建築物の安全を守ることに多くの法律や条例、法令など、そして何より建築指導課の方々の仕事が大きな役割を果たしていることを実感し、今後の大学で学んでいく中でもより法規の大切さを意識して取り組みたいと感じました。

次に住宅課では、公共住宅の管理や計画に関わる業務について学びました。職員の方々が住民の生活に寄り添い、相談や課題に向き合っている姿が印象に残っています。建築というと建物そのものに注目しがちでしたが、実際にはそこで暮らす人々の生活や将来の街のかたちを考えながら進められていることを学びました。また、公営住宅の集約化等の説明を受け、限られた資源や予算をどう生かしていくか、また古くなった公営住宅をどのようにして生かし、立て直していくのかを考える視点に触れることができ、とても新鮮でした。学内ではもっと古い建築や使われていないものに対しての活用について学びたいと思いました。さらに、都市計画的な広い視界が必要だと感じたため、今後の大学の学びの中でより深めていきたいと考えさせられました。

最後に建築課では、公共施設の施工や維持管理の業務について学びました。実際の解体工事を見学させていただき、現場の緊張感や安全など近隣住民への配慮を肌で感じる事ができました。図面や授業だけではわからない部分を知ることができ、建築の仕事は机上だけでは完結しないことを実感し、とても貴重な経験になりました。また、作業の一環としてJWCADを初めて使っていただき、大学でのCADと全く違う操作感や図面を描くことの難しさを体感することができました。この経験から現時点の知識では足りない部分があることを目の当たりにし、今後大学で学びを進める上で、自分自身でもより現場で使用できる知識を深めていきたいと実感しました。

インターンシップの五日間を通して、市役所での建築業務は市民の暮らしに直結しており、大きな責任を伴う仕事であることを学びました。そして、法律や計画、現場や設計など、幅広い知識が必要であると感じました。この体験で得ることのできた学びを今後の大学での勉強に生かしたいと思えます。また、将来は自分の知識や大学で学んだことを生かして、自分の育った市に貢献していくことのできる人材になりたいと考えています。

人の温かさを実感して

大学・経済学部・3年

期間：令和7年8月18日～22日（5日間）

このたびは、市役所での5日間の就業体験の機会をいただき、誠にありがとうございました。市役所で働くということを経験できたことで、これまでの漠然としたイメージが具体的な実感へと変わり、将来への目標や学びに大きな影響を与えていただきました。

体験前は、市役所の仕事に対して「事務的で硬い印象」を持っていました。しかし実際に複数の部署で研修を受けるなかで、その印象は大きく変わりました。市役所の業務は一見すると地道な作業の積み重ねに見えますが、その一つひとつが市民の生活や地域の魅力発信につながっており、直接的に社会を支える仕事であると強く感じました。現場で実際に働く方々の姿を目にし、行政の役割や責任の大きさを学ぶことができました。

今回の就業体験を通して最も印象に残ったのは、職員の皆さまの温かさです。初めて取り組む作業に戸惑うこともありましたが、その都度ていねいに教えていただき、安心して業務に臨むことができました。質問に快く答えてくださり、時には励ましの言葉もいただくなど、人と人とのつながりを大切にしながら働いておられる姿勢に心を打たれました。市役所という職場は単なる仕事の間ではなく、信頼や協力によって成り立っていることを肌で感じました。

また、地域を支えるという意味で、市役所の役割の幅広さにも驚かされました。観光や文化財の保護、市民の生活に関わる事務や情報発信など、部署ごとに取り組む分野は異なりますが、すべてに共通しているのは「市民のために」という思いでした。業務の内容は違っても、根底にある目的は同じであり、その使命感が市役所全体を一つにしていることを実感しました。このことは、机上で学ぶだけでは得られない大切な気づきでした。

体験を通じて、私自身の意識にも大きな変化がありました。これまでは「市役所で働く」ということを漠然とした目標として考えていましたが、今回の経験を経て、それが自分にとって「楽しみであり、やりがいのある仕事」とであると確信することができました。地域のために働くことの意味をより深く理解できたことは、これからの進路を考えるうえで大きな財産になったと感じています。

さらに、この経験は私に感謝の心を強く抱かせました。学生の立場でありながら、実際の現場で学ばせていただいたことは大変貴重であり、このような機会をいただいたことに心から感謝しています。短い期間ではありましたが、日々の中で学んだことや感じたことは、今後の人生に必ず生きてくるものと信じています。

今後は大学での学びをさらに深めながら、今回得た気づきを活かし、地域社会に貢献できる人材となれるよう努めていきたいと思えます。そして将来は、市役所で働き、地元へ恩返しをしていくことができると考えています。今回実感した「人の温かさ」を忘れず、市民に寄り添いながら信頼される存在を目指してまいります。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えてくださった市役所の皆さまに改めて御礼申し上げます。短い期間ではありましたが、多くの学びと気づきを得ることができました。この経験を糧として、今後も成長を重ねていきたいと思えます。本当にありがとうございました。

上下水道の必要性と現場職員の実際について

大学・工学部・3年

期間：令和7年8月25日～29日（5日間）

この度、5日間にわたり参加させていただいた水道事業研修は、私にとって大きな転機となりました。研修前は、水道事業と聞いても、日々の生活に欠かせないインフラという漠然としたイメージしかありませんでした。蛇口をひねれば当たり前のように水が出て、トイレを流せば汚水が処理されるという、その裏側にある人々の努力や技術について、深く考えたことはありませんでした。

しかし、この研修を通じて、その認識は大きく変わりました。特に印象深かったのは、1日目と2日目の上水道施設見学と浄水場での実習です。講義で浄水過程の概要を学んだ後、実際に浄水場を訪れ、大きな沈殿池や砂ろ過槽を拝見しました。職員の方が「この水が、皆さんの家庭に届く安全な飲料水です」と話してくださったとき、初めて自分の身近な存在として、水のありがたさを実感しました。また、水質検査室での緻密な分析作業を拝見し、毎日何十もの項目を検査し、ミリグラム単位の不純物も見逃さないプロの仕事ぶりに触れ、普段何気なく使っている水への感謝の念が芽生えました。

研修の後半、4日目と5日目の下水道管路の維持管理実習も非常に学びが多いものでした。下水道は普段目にすることのない地下に広がる壮大なネットワークであり、その維持管理に携わる方々の地道な努力があってこそ、私たちの快適な生活が成り立っているのだと強く感じました。マンホール蓋の定期点検や下水道管路のテレビカメラ調査を見学し、管路の詰まりや破損を未然に防ぐための、見えない部分での努力の重要性を痛感しました。研修前は、水道事業の業務は定型的なものだと考えていましたが、実際には、想定外の事態に備えるための危機管理体制や、最新技術の導入、そして何よりも地域住民との連携など、多岐にわたる課題に取り組んでいることを知りました。特に、講義で取り上げられた過去の災害事例と、それに対する復旧の迅速さには胸を打たれました。この研修を通して、私の水道事業に対する認識は「当たり前のインフラ」から「人々の生活を支える高度な技術とプロ意識の結晶」へと大きく変わりました。座学で学んだ水道事業の歴史や現状、そして現場で感じた職員の方々の仕事に対する誇りや情熱は、今後の私のキャリアを考える上で、大きな影響を与えてくれると思います。

今後は、この研修で得た知識と経験を活かし、水道事業が抱える課題、特に施設の老朽化対策や、より効率的な維持管理手法について、さらに深く学びたいと考えています。そして、水道事業に携わる一員として、安全で安心な水を未来にわたって供給し続け、私たちの暮らしを支えるプロフェッショナルとして貢献できるよう尽力していきたいと強く願っております。